シンポジウム

1. 認知症の病態解明の進歩—認知症と蛋白異常による分類と病態 司会者のことば

司会 中島 健二¹⁾

司会 山田 正仁²⁾

認知症には多くの原因疾患があるが、Alzheimer病 (Alzheimer's disease: AD), Lewy 小体型認知症 (dementia with Lewy bodies: DLB), 前頭側頭葉変性症 (frontotemporal lobar degeneration: FTLT) などの神経変性性の認知症が多くを占める。しかし、それらの神経変性性認知症の病態機序はいまだに不明である。最近の分子生物学的研究を始めとした基礎研究の発展により、AD・DLB・FTLTなどの認知症の原因に関連すると考えられる蛋白が明らかにされてきた。これらの蛋白にアプローチしていく研究は、認知症の根拠的治療法 (disease modifying therapy) の開発につながるものと期待される。また、これらの蛋白の解析によりバイオマーカーの開発も進められると考えられ、認知症疾患の早期診断への発展も期待されている。

本シンポジウムでは、蛋白からみた認知症へのアプローチ、認知症における蛋白異常に関す

る研究の進歩について示して頂く。認知症における病態的位置づけの解明が進んできている、アミロイドβ蛋白、αシヌクレイン、タウ蛋白、TDP-43 について解説して頂く。

一方、本シンポジウムのプログラムを検討していた 2009 年に、家族性筋萎縮性側索硬化症における fused in sarcoma/translated in liposarcoma (FUS/TLS) の遺伝子変異が報告され、この FUS/TLS が FTLT に関連する可能性が指摘された。しかし、関連性は推定されたもののまだ必ずしも明確ではなかったところから、“概説”として FUS/TLS も含めて認知症に関連する可能性のある蛋白を網羅して議論することとして“概説”の講演を予定した。

本シンポジウムを通して、認知症に関与するこれらの蛋白に関する研究の現状と今後の展望を把握し、認知症研究・医療の課題と方向性を明らかにしていくことができるものと期待する。

¹⁾ 鳥取大学脳神経医学講座脳神経内科学分野, ²⁾ 金沢大学大学院脳老化・神経病態学 (神経内科)

108th Scientific Meeting of the Japanese Society of Internal Medicine: Symposium: 1. Progress in dementia research—Dementia disorders and protein; Introduction.

Kenji Nakashima¹⁾ and Masahito Yamada²⁾: ¹⁾ Division of Neurology, Department of Brain and Neurosciences, School of Medicine, Faculty of Medicine, Tottori University, Japan and ²⁾ Department of Neurology and Neurobiology of Aging, Kanazawa University Graduate School of Medical Science, Japan.